

1章

# 焦りのスパイラルから脱出、 それぞれの戦略をもとう

中学受験に挑む家庭に起こりがちな悩みと焦りのスパイラル。決してご自身の家庭だけで起こることではありません。

受験生活を送る家庭では何が起きているのか。

そのときどのような対策を講じているのか。

まずは冷静に現実をとらえましょう。

苦しんでいるお子さんも親御さんも、

自分自身を責めても、また親子で責め合っても、

悩みは解決されません。

まずは今の焦りからご自分を解放していくことにしましょう。

本章では、なぜ中学受験がこんなにも大変になっているのか、

そのワケを解説します。



## 1 親も子も追い詰められている現実

「自分がどれだけ頑張るかによって、子どもの中学受験の結果が決まる。子どもの将来が決まってしまう」

今、この瞬間、そう信じて、苦しんでいませんか？

良い大学を出て大企業に就職すれば将来は安泰。という時代は終わりました。そのことを強く意識しているお親御さんほど、子どもが18歳になったときに、多様な選択肢を作っておいてあげたい、そのために早いうちからより良い環境で子どもを学ばせたい、将来有利な学校へ進学させたいと考えていらっしやいます。特に都市部ではその傾向が強くなっています。

環境選びの意味では小学校受験という選択もありますが、合格が何によって決まるのか分かりにくいこともあって、中学受験に力を注ぐ家庭の方が多数派です。子どもの努力次第で合格を手に行ける！と期待して、難関校に多くの合格者を出す集団塾に子どもを通わせ始めます。

たいていの家庭では、そのような流れで塾との関係が始まっていくようです。

ところが、塾に通い始めて時間が経つにつれ、日々の生活が時間に追われ、息苦しさを覚える家庭が増えていきます。

その理由のひとつが、塾のテキストと宿題の量です。

塾では、一番上のクラスから一番下のクラスまで同じテキストを使うところが多いので、すべてのレベルの問題を詰め込んだ百科事典のようなテキストになってしまいます。

よっぽどできる子でなければ、基本的に全部終わらせるのは無理。でも親御さんは塾から渡されるものは全部こなさないと受験に失敗すると思いついで、お子さんにやらせようとする。そこに生じる無理が、息苦しさとなるのです。

二つ目の理由は、必要な学習量がどんどん増えることです。

学年が上がるとともに、学習内容が難しくなり、自ずと勉強時間は増えていきます。また学年が上がるたびに授業や特別講座も増えていきます。

大手進学塾では、生徒の過半数が、小5くらいから苦手についていけない科目を意識しはじめ、親子そろってこのままではいけないと危機感をもつようになります。しかし何か手を打とうとしても、その選択を誤ったら取り返しがつかなくなる、



そんなことになったら子どもがあまりに可哀想だ、と思って、今を変える勇氣が出せない。

結局お子さんに「頑張りなさい」としか言えず、塾に言われる通りこなす日々が続いてしまう。危機感を持っている、でもどうすればいいのか分からないという閉塞感が、マイナスのスパイラルとなっていきます。

塾に言われるままでは成績は上がらない。受験までの残り時間は減る一方、打つべき手さえ分かれば抜け出せるはずなのに、追い詰められてしまう親子がとても多いのです。

## 2 受験問題は年々難しくなっている！

そもそも、少子化でもある昨今、中学合格のために、なぜそこまで勉強しなければならぬのでしょうか。子どもの数が減れば競争率が下がるのだから、もつと楽になっても良さそうなのに、どうして合格のハードルが下がらないのでしょうか。

答えは、入試問題がどんどん難しくなっているからです。

算数は、20年前の開成と同じレベルの問題が、いま偏差値40台の学校の入試で出題されています。

開成、麻布、武蔵のいわゆる御三家や、筑駒、灘などの最難関中では、毎年、誰も見たことがない新しいタイプの、しかも前年より難しい問題が出題されます。

そして翌年以降、その問題を見た他の難関校が、形や条件を少し変えて出題するようになり、その問題パターンは、だんだん偏差値が下の学校へと連鎖していきます。そして10年後には偏差値50台の学校でも出題されるようになるのです。

この時点で、その問題パターンは塾のテキストでも標準的な問題として扱われ、塾は解き方を生徒に覚えさせます。こうして塾のテキストに載せられる問題は膨れ上がりが続けるのです。

学校側は自分の学校にふさわしい子を、何とか見つけたいと考えます。難関校になればなるほど、高い情報処理能力と、問題解決能力がある子を欲がっています。そんな子を選ぶために、学校側は受験生が見たこともないような問題をぶつけてくるのです。

そのような難問を学校の狙い通りに考える力だけで解ける子は、ほんのひと握り



だけ。ほとんどの子は暗記した解き方を土台にしながら、その知識を使って解くという方法でしか臨めません。

とはいえ、なにしろ新しいタイプの問題が続々と生み出されるのですから、覚えなければいけない量が以前に比べて増えすぎてしまっただけの勉強では、結果が出てこないのはむしろ当然なのです。お子さんは悪くない。

昔は竹刀を振りかざして「頑張り」と激励する塾もありましたが、いまはただ頑張っても成績は上がりません。

子どもの学習をサポートし、結果につなげていくための「テクニク」が昔とは変わってきている、もっといえば、すごいスピードで進化し続けているのです。

### 3 学校で習わないことが出題される

難関校の入試では、問題の難易度が年々上がっているだけではありません。学校で習っていないこと、塾での学習範囲ではないことが、解答として求められること

があります。それは、時事問題や社会現象、出来事や事件など、その時代に起きていることにアンテナを張っていないと、まったく解けない問題。そのような問題が出題されるのも、近年の顕著な傾向です。

たとえば、理科では、小学校で習っていないことを長々と文章で説明してから、問いに答えさせるケースがよく見られます。

「宇宙探査機を惑星に着陸させるとき、ロケットエンジンを逆噴射させて、着陸する速度を遅くします。しかし逆噴射だけで着陸するのは難しく、特に重力が大きい惑星だと探査機は地表に衝突して壊れていました。それでパラシュートをあわせて使う方法がまず考え出されました。その後1997年にはアメリカの探査機が逆噴射の後、ビーチボールのようなクッションを使うことで火星の着陸に成功しました」  
この説明に対して、以下のような問いが出されます。

「アメリカの探査機は世の中に普及しているどんな技術を使ったのですか。またどういう仕組みで着陸したのですか」

正解は、

「自動車用に普及しているエアバッグを応用したもの」

「エアバッグが衝撃を吸収することで、探査機が無傷のまま着陸できるようになった」です。

そもそもエアバッグを知らない子にはお手上げですね。

また社会でも、ここ10年くらいで難問の傾向がずいぶん変わってきました。以前は、大学入試に出てきそうな、日本史や世界史の「細部の知識」を問うものでした。それはそれで難しいのですが、いまは、ある事件が起きたときに、それはなぜ起きたのか、その結果社会にどのような影響を与えたのかを論述させます。

これは東大入試の日本史や世界史と同じ形式で、ただ暗記するのではなく、自分の頭で理解し考える力を求めるタイプの難問です。

難関校がこのような難問を出すのは、生徒を全員東大に行かせたいからではなく、未来のリーダーに育てたいと考えているからです。その結果、日本の最難関大学である東大と同じ形式の問題になっているのです。

いずれにしても、難関校においては、問題の内容が多様になり、汎用性や応用性が求められるようになってきています。学校や塾で教えてもらえないことは、日常的に新聞を読んだり、ニュース番組を見たりと、家族で社会現象を話題に取り上げ

るなど、家庭内でフォローしないといけなことが増えているのです。

#### 4 自然な成長にまかせると中学受験は合格できない

8歳から11歳といえば、本来は、好奇心をもって楽しみながら勉強して、そのなりに発見しながら育っていく時期です。

お子さんの成長に大切な時期だからこそ、中学受験との向き合い方には頭を悩ませられますね。楽しみながらやってくれば理想的だけれど、目標を叶えるには我慢も必要よね・・・でも、子どもにストレスをかけすぎるのもどうかと思うし・・・

この時期のお子さんのやる気を失わずに、気分よく勉強させるテクニックは、XX章で詳しくお話ししようと思いますが、一つだけ理解して欲しいことがあります。

「お子さんの自然な成長を待っている、中学受験の要求には間に合わない」ということ。

いずれの科目も、小学校レベルの学習ではどうして中学受験には太刀打ちできな



いということは、あらためて説明するまでもないと思うのですが、特に注意したいのが国語です。

一般的な小学生の自然な精神的成長では、読み解くのが困難な文章と問題が出題されるのです。難関校では、中3や高1レベルの文章が用いられるのが普通ですし、大人の複雑な心情を記述する力も求められます。

このような出題に対応するには、柱となる語彙力の強化が重要です。

語彙力は、日常の読書や、大人の会話を聞くことで自然と育つものです。しかし、小学生の段階で中3や高1レベルの文章を読みこなすためには、意識的に難しい言葉を勉強し、語彙力を高めなければなりません。

子どもの自然な成長に任せていては対応できないのです。

国語はいろいろな本を読めば解けるようになると、漠然としたイメージをもっている親御さんもいらっしゃいます。しかし、中学受験で求められる「読める力」は、意識的にお子さんに与える必要があります。年相応の本を読んでいるだけでは、受験国語の点数はなかなか伸びないということに注意しましょう。

## 5 塾に追い立てられる日常生活

「中学受験生は毎日塾通いするものだ」と思っている方は、実際の塾の時間割を見ると、「あれ、意外に授業日数は少ないんだ」と拍子抜けすることがあるようです。

小4の授業は週2回という塾が多いですし、小5でも週3回ぐらいですから、週に5日も6日もというイメージの方からすれば、少なく、楽に感じるのでしょう。

でも実際に通い始めると、瞬く間に授業と宿題に追われる毎日がやってきます。なぜなら、宿題にかかる時間が、塾の授業時間以上に必要になるからです。

たとえばSAPIXでは、小4は週2日ですが、授業が夜9時までであるため、帰宅してから宿題をこなそうとすると、寝るのが23時を回ってしまいます。まだ体力もない学年ですから、そうそう無理はさせられず、宿題は次の日に持ち越しです。学校から帰ってきて、復習と宿題をこなせばもう夜です。さらに月1回のテストに向けての勉強も必要です。成績によってクラスが乱高下させられるので、親も子も知らず知らずの内に必死になっていきます。

こうして小4の段階で、週に5日か6日は塾の勉強に時間が取られる生活が始



まってしまうのです。

小5では授業が週3回になり、小6になると土曜日は長時間の特訓授業、9月から日曜日に志望校別特訓も始まります。祝日にもテストがあり、気が付けば1週間のうち、塾に5日も6日も通うことになります。

すべての科目と講座で宿題が出るので、勉強しない日がないのが当たり前前の生活へ。夜9時に塾が終わり、帰宅してから宿題をしていたら、寝るのが深夜0時をまわることも珍しくなくなってきました。寝不足から朝学習の約束が守れなくなり、親子喧嘩になることもあるでしょう。

学校ではむしろしゃしゃりした気分が過ぎ、グズグズして帰る時間が遅くなる。帰るとすぐに塾に行かされ、塾の授業中はやる気がないのでポーツとして過ごす。

その姿を見た親御さんは感情が高ぶり、毎日のように腹を立てるの繰り返し。週末には、その分を取り戻させようとする親御さんに対して、塾のない日くらいゆっくりしたいお子さん。

これでは家庭内がギスギスして上手く行かなくて当たり前ですね。

でも、効果が得られぬまま、塾に追い立てられるだけの日々を2年以上続けてし

まうご家庭は珍しくありません。

もっと問題なのは、そんな日々疑問を持たず流されてしまうこと。問題意識を持って根本的な解決を目指すべきです。

そのためには、塾との付き合い方を知ること、塾、お子さん、そして親御さんそれぞれの役割を考えることが必要です。XX章で説明しますね。

## 6 塾の現実と家庭へのしわ寄せ

皆さんは、塾業界の実態をどのくらい熟知したうえで、塾選びをしているでしょうか。

「お子さんの成績を上げることができるプロの講師が、どんどん減っている」。

そう聞いて、ショックを受けない方はどれくらいいるでしょう。

いま、塾業界に構造的な問題がふたつ起きています。

ひとつは講師の質の低レベル化です。

この10年で個別指導の塾の人气がずいぶん高まりました。それに伴い、「先生」



と呼ばれる人の数が水膨れしています。個別塾は集団塾に比べて多くの講師が必要だからです。

また一方で、その余波から、集団塾では講師の確保が困難になり、以前なら「修行中」として授業を持たせられなかったレベルの講師も登壇させないと、教室運営ができなくなっています。

その結果、大手有名塾の講師でも、テキストをどう使うのか分かっていない人が増えています。

大手の塾のテキストには、良さを活かすための使い方があり、解答や解説の書き方にも意図があります。実は解説の肝になる、一番大事な部分は書かれていません。そこは本来講師が授業で教えるようにしているからです。

しかし、「分かっていない」講師が授業をすると、「あとは家で解説を見て頑張っ  
てね」などと平気で言ってしまうのです。当然、お子さんはまったく分からないまま先に進むことになります。お母さんも「何で解説を読んでも分からないのだろう」と悩んでしまいます。お母さんのせいではなく、塾が悪いのです。

もうひとつは、優秀な学生が塾の業界に入ってこなくなったことです。

20年以上に渡って日本経済の不況が続いていることで、大学生のバイト事情が大きく変わりました。大学の講義は真面目に通い、英語の勉強にも力を入れる。就職活動にも早い時期から着手し、インターンを掛け持ちする学生すらいる。日々が忙しいからバイトはできるだけ短期で拘束されないものを選ぶ。気がつけば、塾でバイトをする学生がいなくなっているのです。

以前は優秀な学生が塾でバイトをして、子どもに教えているうちに面白くなって、そのまま卒業後も続けるというケースが多々ありました。彼らのような人材が業界を支えてきたという一面があるのです。

しかし、いまは優秀な新しい人材が入ってこない。つまり、力のあるプロ講師は減る一方なのです。

その結果、授業で習ったはずの問題なのに家庭でまた一から教えなければならぬといったことが、頻発しています。塾の人材不足、低レベル化によって、そのしわ寄せが全部家庭に向かっているのです。





## 7 客観的に見られない親の現実

私たちのもとには、成績が上がらなくて、ついお子さんを責めてしまうと悩んでいる親御さんが大勢相談に来られます。

誰も責めたいなんて思っていません。どの親御さんも、わが子を褒めて応援してあげたいのです。でも、怒ってしまう。言いたくないことを口走ってしまう。なぜでしょう。

中学受験に取り組む親は、人一倍子どもの将来を大切に考えている人です。子どもへの愛情からこの道を選び、一心に応援します。

しかし、思うようにお子さんの成績が上がらないと、「このままで大丈夫なのだろうか？」という不安が生まれてきます。その不安の中には、「自分のせいでこの子の受験を失敗させてしまうのではないか」という親ならではの不安も隠れています。その隠れた不安は、時間が経つにつれ膨らみ、自分でもよく分からない焦りと不安、恐怖に変わっていきます。そして大きく膨らんだ恐怖心は、ある日、ささいなきっかけで怒りとして爆発してしまうのです。

宿題をすっかり忘れてただけなのに、「心構えが出来ていない！もう受験なんか止めてしまいなさい！」と何十分にも渡って怒鳴りちらしたり、テストでたまたま計算間違いをしただけなのに、「こんな簡単なことも出来ないんだから、あなたにはもう無理なのよ！」と激しく嘆いたり。

少し冷静になってみれば、そうじゃないことは分かりそうなものなのに、感情が高ぶって子どもを過剰に責めてしまう。それだけ、わが子のことが大切に愛情が深いのです。

そうではありませんか？  
なによりお子さんのことを大切に考えている皆さんに、私は一つの真実をお渡ししたいと思います。

それは、中学受験で成績が上がらないのは、お子さんの能力のせいではないのだということ。そして親のせいでもないということ。

誰かのせいではなく、中学受験の仕組みをだれも教えてくれなかったことが問題なのです。何をどうすればいいのか分からないまま、手探りで恐る恐る暗闇を歩くような立場に追いやられているから、不安にもなるし、感情的にもなってしまうの



です。

そこを抜け出していたくために、私たちが提案できることはひとつ。

「戦略をもつ」ことです。

難しいことのように聞こえるかもしれませんが、こう言いかえるとどうでしょうか？

戦略がない⇨今まで通り、周りと一緒に、言われたことを必死にやり続けていく。

戦略がある⇨今までのやり方を変えることを恐れず、目標が何で、どうやれば一番成功しやすいかを考えて、行動する。

集団塾から言われたことを一生懸命やることは決してマイナスではありませんが、塾に振り回されないようにするには、「戦略」が必要です。

塾の代表の私が、「塾に振り回されないで」などと言うのは不思議に聞こえるかもしれませんが。実は、私たち個別指導教室SS-1は、塾というくりには入っていませんが、いわゆる塾とは少し違います。

「塾のための塾」。

集団塾をうまく使いながら、お子さんの力を伸ばす方法をご家庭と一緒に考えていく塾です。

中学受験で苦しみ悩んでいるご家庭の多くは、親御さんがすべてを抱え込んでしまいがちです。勉強の内容ややり方も、塾の講座の受け方も、初めて受験を経験するご家庭にとっては分からないことばかりなのに、がんばってしまうのですね。でも、悩んだときには、がんばるよりも相談することをおススメしたいのです。

第三者の目で、冷静に検証、分析すると、当事者には見えないものが見えてくるからです。

この本では今から、客観的な目と心を持ち、戦略をもって臨めば、中学受験の苦しみや悩みがいかに楽になるか、合格への道がどのように開けていくのかをお話ししていきます。

一緒に「戦略がある中学受験」を歩んでいきましょう。

